

黒い林檎

鐸木能光

(立ち読み版 プロローグ(第一章))

プロローグ

公園の一角で鳴いていた蝉が急に鳴きやんだかと思うと、隣接する高級マンションの前に、大型のワンボックスカーが停まった。車体には電器店の名がペイントされている。

中から、作業服を着た男が二人出てきて、後ろのハッチドアを開けた。二人はダークグリーンの大型冷蔵庫を降ろし、キャスタ―に乗せてマンションの中に運び込み始めた。

管理人室の窓から、丸い眼鏡をかけた老人の顔が覗く。

冷蔵庫を訝しげに見ている管理人に、作業服の男の一人が帽子に手をかけて軽く会釈した。その間、もう一人がパネルの数字ボタンを押す。

オートロックのドアが開いた。

管理人は、住民の一人が冷蔵庫の配達を告げられ、部屋の中から入口のオートロックを解除したのだと信じて疑わなかったが、そうではない。作業服の男は、ボタンをいくつか押したただけで、一言も喋らなかつたのだから。

冷蔵庫と一緒にエレベーターの中に消えていく男二人を、管理人は無表情で見送った。

シャワーの音にかき消され、女の耳には、玄関ドアが開く音は聞こえなかった。

麻布の高級マンションの五階。玄関ドアは電子ロックだし、エントランスホール横には管理人が常駐している。彼女は今まで、自分の居住空間の安全性を疑ったことはなかった。

二度目のシャンプーを濯いでいるとき、背後でバスルームのドアが開いた気配がした。

振り向く間もなく、強い力で口をタオルのようなもので押さえられた。シャンプーや石鹸の香料とは異質のにおいが鼻を突く。

何が起きたのか判断する時間もないまま、彼女はバスルームの床に崩れ落ちた。

男の一人がシャワーを止めた。

もう一人が玄関に戻り、冷蔵庫を運び入れる。

冷蔵庫の扉を開けると、中には仕切り棚や冷凍庫などは一切なく、完全な空洞になっていた。コンプレッサーさえも取り外されて、ただのコンテナに加工されている。

男たちは浴室に倒れている女の身体をタオルで拭き始めた。

「三十八って言ってたか？ 身体は若いな」

背の高いほうの男が、女の乳房を弄びながら言った。

「遊んでる暇はないですよ。余計なことにはやるなど念を押されてるでしょ。血一滴流すなっつて」

「ああ、分かっているさ。……それにしても、七十八の工口爺さんの妻か。世の中、金だな」

「いいから、入れますよ。そっち持って」

二人は用意してあった木綿地の布で女をぐるぐる巻きにし、まるで引っ越しの荷物を扱うように、冷蔵庫に手際よく押し込んだ。扉を閉めると、二人は冷蔵庫の表面に貼ってあったダークグ

インのフィルムを剥がし始める。フィルムを完全に剥がすと、白い冷蔵庫に変貌した。

入って来たときと同じように、二人の男たちはマンションの玄関を堂々と出ていった。

管理人は、白い冷蔵庫を運び出す二人を無言で見送った。運び込んだダークグリーンの冷蔵庫と同じ形、大きさなのだが、色が違っているので、まさか同じものだとは思わない。古くなった冷蔵庫を処分するために運び出しているのだと思いこんだのは当然だろう。

ワゴン車が走り去ってしばらくしてから、ずっと沈黙していた蝉が、再び懸命に鳴き始めた。

麻布のマンションに一人暮らしをしている三十八歳の独身女性が失踪したというニュースは、一週間経っても、いっこうに報じられる気配はなかった。

1409というプレートがあるドアの前に立ち、瀬名美智郎は、もう一度左右を見渡した。ホテルの廊下には誰もいない。

ドアフォンを鳴らす。しばらくして、チェーンをつけたままの状態ドアが二十センチほど開いた。

「山田様のご紹介のかたですね？」

隙間から顔を覗かせたのは、あどけない顔立ちをした黒髪の少女だった。

「そう」

「お待ちしていました。どうぞ」

すぐにドアが開き、瀬名は部屋の中に通された。

少女は瀬名にライティングデスク付属の椅子を勧めると、自分はベッドの縁に腰掛けた。

瀬名はサングラスを外し、改めて目の前の少女の全身を観察した。

最初に目を引いた黒い髪は、やはり染めておらず、背中の中程までまっすぐに伸びていた。

会社の制服のような紺色のスーツに黒のストッキング。まだ十代だろうに、真夏に似つかわしくない、律儀すぎる服装だ。

だが、その地味なファッションと顔の幼さのアンバランスが、瀬名には新鮮だった。化粧の仕方を知らず、口元にしまりのない少女たちには、完全に食傷している。

コンサート会場では、そんな女の子たちが全員立ち上がり、絶叫し、不揃いの波となつてうごめく。その光景に、最近では軽い吐き気を覚えることもある。

「シータです。よろしくお願ひします」

黙っている瀬名に、少女はそう挨拶した。

「シータ？ 源氏名にしても妙な名前だね」

「ゲンジナ？」

「いや……芸名というか、ニックネームのこと」

「呼び名のことですね。淡泊でいいかなと思って。他の子もギリシア語の数字やアルファベットの名前をつけてるんです。テトラにラムダ」

「ふうん」

「お客様のお名前を教えてください。偽名でもいいですから。じゃないと、呼びにくいし」

シータと名乗った少女は、そう言いながら無邪気な眼差しで瀬名を見つめた。

この子は気がついていないのだと、初めて知った。

サングラスを外したときに、あるいは騒ぎ始めるかもしれないと思ったのに。マネジャーの濱口はどう説明していたのだろう。

「濱……いや、山田さん、何も言っただけじゃなかった？」

名乗る前に訊いてみた。

「いいえ……。あ、そうだ。びっくりするような有名人が来ても、絶対に秘密は守るようにと言われましたけれど……あの……もしかして、有名なかたなんですか？ ごめんなさい。私、テレビはほとんど見ないし、タレントさんってあまり知らないんです」

どうやらその言葉は嘘ではないらしい。

ステージで歌うときは、アイコンやシャドウを入れている。

今はほぼ素顔だが、それでもファンならば気がつくだろう。この子は、俺が「ミッチ」だと名乗っても分からないのかもしれない。

瀬名は、あっさり崩れた自信と、それ故に手に入れた安堵感の狭間で、思わず苦笑した。

瀬名美智郎は、CPUゼラというロックバンドのリードヴォー

カリストだった。

CPUゼラは、日本の芸能史上初めて、単独アルバムの売り上げが五百万枚を突破したカリスマ的バンドだ。

自分の正体を知られずにこの年代の少女を抱くなんて、いつ以来のことだろう。毎日のように新しい女に会うが、相手は最初から自分を知っている。自分にとっては今会ったばかりの未知の女なのに、女のほうは、自分に対してすでに特定のイメージを抱き、情報を得ている。ときには生年月日や血液型まで知られていることもある。「ファンだったら、そのくらい知ってるよ」と言っていて、嬉しそうに笑う女たち。

売れ始めた頃はそれが快感だったが、今ではそういう状況に疲れを感じる。

「じゃあ、ノツポさんでいいですか？ 背が高いから」

「え？」

「お名前です。教えていただけにならないなら、勝手につけちゃいますよ」

「あ、瀬……川。瀬川だ」

「長谷川さんですね。よろしくお願いします」

咄嗟に一字変えた姓を名乗ったが、口ごもった分、少女は聞き違えた。なんでもいいので、そのまま訂正はしなかった。

少女は枕元に置いてあったバッグの中から、薬包紙に包まれたものを二つ取り出し、サイドテーブルの上に置いた。

「錠は、今ご利用ですよ？ 効果が現れるまでに少し時間がかかります」

「え？ ああ、それが例のやつか。じゃあ、今飲むよ」

「はい。じゃ、十万円、前金でお願いします」

清純そうな顔に似合わない、即物的な物言いだった。それまで瀬名が抱いていた一種ロマンチックな気分がたちまち壊れた。

「一錠、五万円つてわけか」

「いいえ。一錠一万円です。八万円は私のご奉仕料です」

奉仕？ まるで新興宗教の信者みたいなことを言う。あるいはアダルトビデオに出てくる召使いか。

瀬名は用意してきた十万円入りの封筒をテーブルの上に置いた。少女はそれを受け取り、さっと中身を確かめると、すぐにバッグにしまった。

十万円の札束も、今の瀬名にはパチンコ玉を買うための千円札程度の重みしかない。金はいくらでも使える。「物」を買うことにはとづくに飽きてしまった。欲しいのは物ではなく、退屈しない時間だ。あるいは、真に興奮できる新しい刺激。

マネジャーの濱口と飲んでいるとき、そんな話になった。

「本物の美少女つて、もう日本にはいないんじゃないのかな。チベットの山奥とか、ラップ人の村とかにまで行かないと、見つけれない気がする」

そう漏らした瀬名に、濱口は少し躊躇いながらも、この女子高生売春グループのことを教えてくれたのだ。

「見た目だけやったら、ごつつい美少女で、まだ日本にもいますよ。その子と、十万円で最高のエッチすることもできます。せやけど、ちょっとやばいんですわ。薬を使うよつて」

「ハツパ系？ それともシャブ系？」

「どつちともちやいますわ。フゲン^{ヘータ}つて聞いたことありますやろ？ あれ、噂だけやのうて、ほんまにあるんですわ……」

濱口は、とろんとした目つきで、自分の体験を告白した。

最初は半信半疑で聞いていたのだが、濱口の口調があまりにもまじめなので、つい自分も試してみる気になったのだった。

そして今、目の前にいるシータというこの少女は、毎日彼に群がってくるグループピーたちとは確かに違う人種だった。

こんな女の子と二人で話ができるだけでも、十万円は高くないと思う。しかも、噂の「フゲン」までついている。当分、仲間内でこの話題を楽しめるだろう。

薬包紙を開くと、黄土色の丸薬が現れた。ウサギの糞ほどの大きさがあある。

形も少しいびつだし、手作り風の丸薬だ。マネジャーの濱口から話を聞いてなければ、とても呑み込む勇気がなかっただろう。

少女が冷蔵庫から出してきたミネラルウォーターで、瀬名はそれを胃の中に流し込んだ。その様子を、少女はじつと見つめていた。

「本当に高校生なの？」

ついそう訊いてしまった後で、まるでオヤジの台詞だと気づき、自分でも恥ずかしくなった。ごまかすために、少女が返事をする前にこう付け加えた。

「いや、髪を染めてなくて、まともな喋り方をする高校生を、久しぶりに見たもんだからさ」

「私が高校生だって言うと、長谷川さん、困るんじゃないですか？ 後で、高校生だとは知らなかったって言えなくなるし」

「じゃあ訊かない。で、このグループは君の他に何人いるの？」

「何人いるかは秘密です。でも、多くはいません」

「みんな君みたいな子なのかな。つまり……」

「髪を染めてなくて、『まともに』喋るってことですか？ そう言えば、みんな髪は染めていませんね」

「そういう厳しい学校なの？」

「いえ、クラスには染めている子のほうがずっと多いけれど……あ！」

のせられて、本物の高校生だということを書いてしまったことに気づき、少女は片手で軽く口を押さえた。

そんな仕草さえもが、わざとらしくなく、新鮮だった。

瀬名は、思わず勃起している自分に気づいた。

勃起……これほど固くそそり立ったのはいつ以来だろうか。

瀬名はまだ二十八歳だが、過労と女たちへの失望で、このころずっと不能気味だった。

どんな女を前にしても、できないことのほうが多い。できたとしても、以前のような征服感や充足感が味わえない。ペニスは辛うじて挿入が可能な程度の堅さにしかならなかったし、射精のときも、放出するというよりは、漏れ出るといった感覚に近かった。

そう。濱口の話で瀬名が興味を持ったのは、美少女云々よりも、むしろ驚異的な回春薬「フゲン^{ベータ}」を入手できるということのほうだった。

本当にさつき飲んだ薬のせいなのか？ まだ数分しか経っていないのに。

しかも、股間のものだけではなく、身体全体が変化してきている。ここ数日、三、四時間しか寝られず、疲れきっていたにもかかわらず、身体中の血液が加速しながらめぐり始めた感じだ。適度な運動の後のように、筋肉に弾力が増した気もする。かといって、息苦しかったり動悸が激しくなるわけではない。小学生の頃、給食を呑み込むように食べて、遊び場を確保するために校庭に飛び出していったときのような、無邪気で抑えようのない活力が蘇ってきた気分だった。

その見えないエネルギーを少し抜き取るように、瀬名はふうつと軽く息を吐いた。

下半身の緊張は、もはや痛みを伴うほどにまで高まってきている。

「すごいな。この薬」

瀬名はテーブルの上に残っていた一包をつまみ上げて言った。

「もう効いてきましたか？ やっぱり、お若いから、効くのも早いのかな」

少女がちょっと誇らしそうな笑みを浮かべた。

女がいくときつて、こういうことやったんかと思いましたわ。いや、あれはきつと、女が行くときより百倍いいんと違うかな

濱口が漏らした言葉を思い出す。

半信半疑だったが、これなら期待できる。

今や、瀬名の下半身は、自分の肉体の一部とは思えないほど勝手に硬直し、萎える兆しなどみじんもなかった。

立ち上がり、シータと名乗った少女に近づく。スーツのボタンを外し、そのまま脱がせた。シータは何も言わず、されるがままになっていた。

夏物のスーツの下は、ごくシンプルな白いブラウスだった。すぐ裸にさせるのは惜しいような気がして、両肩に手を掛けた。

少女の肩の丸みは、瀬名の両掌の中にすっぽりと収まった。名人が設計した家具の一部に触れるような感触をしばらく楽しんでから、右手を背中に回した。

薄い木綿の布地越しに、肌の弾力が伝わってくる。

たまらず、強く抱き寄せた。

背中まで届く少女の黒髪が揺れ、瀬名の頬を撫でた。そのくすぐったさに、胸の奥のほうから熱いものがこみ上げ、思わず吐息が漏れた。

自分の身体が初つひな反応を示していることに、瀬名は改めて驚いた。

女の身体に初めて触れたときのような歓喜。そうした感動は、過去……いや、前世に置き忘れてきたつもりだったのに。

これもフゲン という薬のせいなのか？

瀬名はさらに力を込めて少女の身体を抱きしめた。

「痛い……」

「あ、ごめん」

「すごい力。乱暴なのは嫌いです」

「そんなつもりじゃないんだ。つい興奮してさ。ごめん」

照れ隠しのように、少女を軽く押してベッドの上に横たわらせた。

覆い被さるようにしてブラウスのボタンを外すうちに、瀨名の頭の中は完全にトリップ状態になっていった。

指先が少女の身体に触れるだけで、そこから未知のエネルギーが注入されるような感覚。まるで全身が性感帯になって、これから頂点へ登りつめていくための準備を始めているかのようだ。

単に勃起を促すだけの薬だと思っていたが、フゲン は精神の高揚ももたらすらしい。

しかし、そんなことを考える力さえ急速に失われ、ただ、全身を、波打つような至福感に委ねていくことだけしかできなくなつた。

理屈はいい。今は、この満ちてくる至福のうねりを逃したくない。

ブラウスのボタンが瀨名の手によってすべて外されると、少女は一度上半身を起こして、自ら両腕を袖から抜いた。

パッドの薄い、ごくシンプルなブラからは、思ったよりも谷間の深い乳房がのぞいている。

瀨名はブラをつけたままの白い乳房に唇をあてた。

子供のときに飼っていたウサギに似た匂いが、かすかに鼻腔をくすぐった。学校から帰つてくると、まっ先にウサギを抱き上げ、柔らかな体毛で被われた暖かい肉塊に鼻を押しあて、匂いを嗅いだものだ。

ピョンキチと名付けたそのウサギは、かすかに若草の匂いがし

た。学校で嫌なことがあったときも、あの匂いを嗅ぐと、不思議に気持ちが楽になった。

いつまでも乳房に顔を押しあてている瀬名の頭を、少女は、赤ん坊を寝かしつかせる母親のような仕草で、そつと撫でた。

瀬名の全身が軽く痙攣し始める。

どうしたというのだろう。髪をそつと撫でられたただけなのに、身体中に快感が走り抜ける。髪の毛の一本一本までもが性感帯になつてしまつたかのようなようだ。

あまりの気持ちよさに、恐怖感さえ覚えた。

このままこの快感が増大していったら、最後は神経が快感を受けとめきれずに死んでしまうのではないか？

しかし、そんな懸念さえ消し飛ぶほどに、快感は直線的に増大していった。どこまでいくのか。快感という概念さえも超える、まつたく未知の感覚に突入していく。

これは……いつもの自分の身体ではない。何かまつたく違うものになつている。すべての細胞が裏返つてしまつたかのような感覚。

理性が宿る余裕がないほどの性感の集合体。何も制御できない。何も考えられない。

いや、考える必要などない。コントロールする必要もない。

人間は、この快感を得るために生まれてきたのかもしれない。どんなセックスでも満たされなかつた、快感の最後の隙間。その先に何かがありそうदैいて、結局は得られなかつたもの——それが今、身体中を突き抜けている。粘膜レベルの快感の先には、こんなとてつもないものがあつたのか……。

目を開けているはずなのに、見えている世界が違つた。皺のよつたシーツ、少女の身体……網膜に結んだ像は現実のものなのに、いつもの視覚とは違つた。身体の外に景色があるのではなく、身体

が消え、景色と一体化しているような浮揚感。

肌が接触している感覚も、まったく違う。少女の肌と触れていることで、存在が溶け合い、確実な安堵に変わっていく。

そう、これは肉体の快感などではない。存在そのものに対する快感だ。自分が存在していることの喜びが、精神や肉体の壁を飛び越え、新しい小宇宙の中で踊っている。

瀬名はうめき声を上げながら、少女の、白く柔らかな身体にすがりついていった。

よく晴れた午後だった。

藤堂景康はひとり、施設の敷地の片隅にある物置小屋の前に佇んでいた。

七十八になっても、どこかといって悪いところはない。さすがに歯は一部入れ歯になったが、それでも、自分よりもっと若くても総入れ歯にしている連中がいることを思えば、本物の歯が半分以上残っているのは自慢してもいいくらいだ。

嘘！ 藤堂さん、そんな……

薄気味悪いものを見るような目で、あの女はそう言った。

困りましたね。じゃあ、手でしますから

ふざけるな。俺は汚物か？ 寝たきりの連中のおむつを替えるのと同じように、俺の甦った逸物を「処理」するといふのか？

怒りと虚無感が同時にこみ上げてきた。

あれが最後の一錠だったのに。

ただ受け入れてくれるだけでよかったのに。

もう少しで、七十八年の人生において初めての快感に到達できたかもしれないのに。

予感は十分にあった。

あの薬を試すのは三回目だった。

最初の一錠は、自分の部屋でこっそり飲んでみた。

一体どんな効果があるのか、まったく分からないまま、怪しげな薬を飲むのは多少の勇気が必要だったが、すぐに開き直れた。

この薬が原因で死んだところで、別にどうということはない。

これから先、死ぬまでにどれだけの時間が残されているのかは分からないが、期待できるようなことは何もない。感動もないまま、生物的に生きながらえることにどれだけの意味があるだろう。

どんな効果があるのか、いや、多分なんの効果もないだろうが、怪しげな薬を飲むということでも多少の好奇心が満たされる。それだけでも儲けものだった。

ところが、その薬の効果はとてつもないものだった。

弾力を失った肉体が、突然何か別のものに変わった。

若い頃は、人間誰でも、病気や怪我をしていない限り、肉体の存在を意識することはあまりない。それが、歳を取るにつれ、特に何もなくても、身体の不自由さ、限界を意識することが増えていく。

中年以降、朝、目が覚めるたびに、自分の身体を重荷と感じ続けてきた。どこかが痛む、力が入らない、すぐに疲れる……そうした感覚とずっとつき合ってきた。

その忌まわしい肉体が消滅し、自分の意識が別の何かとして再生したような感覚。

肉体は確かに存在しているのに、精神は肉体に縛られていない。酒や薬物による一時的な解放感や浮遊感ともまったく違う。

すべての細胞が輝き出すような歓喜の中、藤堂は夢うつつのひとときを過ごした。

元の状態に戻ったとき、彼は自分がいかにもつたいないことを

してしまっただのかを思い知り、後悔した。

短い時間とはいえ、衰えた肉体の呪縛から解放されたのだ。それなのに、何もしなかった。なんと愚かなことか。

二錠目を飲むまで、数日かけて考えた。

何か足りない。この薬は、一人で飲んではいけないのだ。

かつて体験したことのない快感が押し寄せる中、心は、何かとつながろうともがいていた。

肌を合わせ、存在を融合させる相手が必要なのだ。誰かと抱き合いながら、あの快感を迎えられたらどんなに素晴らしいことか。相手がいれば、きつと、到達できなかつた未知の快感への扉が開けるに違いない。

数日後、藤堂は二錠目を飲んでから、大伴公子きみこの部屋を訪ねた。公子は彼より十歳年下の六十八歳。老人ホームの中では最も若い入居者だった。

文房具メーカーの重役未亡人。何不自由なく暮らしてきたのだろうが、家族の愛にだけは恵まれなかつたらしい。子供の話題になると決まって顔を曇らせ、話をそらせるのが常だった。

色白で上品な顔立ち。ホームの中では、男性入所者の人気を一身に集めていた。

藤堂もまた、公子の存在をいつも気にしていた。

特に仲がいいというわけではないが、話しかければいつも笑顔で応じてくれたし、自分のことを嫌いではないという確信はあった。

その夜、二錠目を飲み、藤堂は公子の部屋を訪ねた。

ドアの前で、いつもとは違う気配を感じた。しかし、彼の身体も変化を見せ始めていたところだったし、軽くノックをしてから、思い切つてドアを開けた。

細長い部屋の奥に、ベッドがある。

顔だけをこちらに向けて、公子は驚いた目で彼を見つめた。彼女は全裸だった。

薄明かりの下、皺が刻まれた肉体が横たわっている。

そしてその上には、やはり全裸の男が覆い被さっていた。

源治郎……彼よりも三歳年上。八十歳を超えた老人だった。

しまりのない臀部をこちらに向け、源治郎は一心不乱に公子の肉体に挑んでいた。

そして、藤堂は見てしまった。

源治郎の股間に、そこだけ見違えたように堅くそそり立つ陰茎を。

藤堂は黙ってドアを閉め、自分の部屋に戻った。

そうだった。あの薬を持っているのは自分だけではなかったのだ。源治郎もあの快楽を知った一人だったか……。

それからの小一時間は、思い出さたくもない。

肉体の歓喜が勝手に訪れ、空しく通り過ぎていった。

こんなことなら、公子の部屋を訪れる前に飲むのではなかったと後悔したが、遅かった。

そしてとうとう最後の一錠になった。

かけがえのないその一錠を試みる相手として、藤堂は田辺亮子を選んだ。介護スタッフとしてホームに常駐している女性の中ではいちばん若い。

整ってはいるが、彫りが浅く、幸福を逃す貧相な顔だち。色が白いのは取り柄だが、栄養が足りないのか、自律神経失調障害があるのか、冷え性で、いつも人より一枚余計に服を着ている。

噂では、看護婦をしているときに男に騙され、借金を抱えて逃げるようにこの地へやってきたらしい。

正直なところ、藤堂の好みではない。しかし、ホームの中でいちばん若く、美しい女性であることは間違いなかった。

そうだ。最初から悩むことはなかったのだ。最高のひとときを手に入れるためなのだから、求められる最高の相手を選べばいいのだ。

しかも、亮子の仕事は老人たちの介護だ。先の長くない人間の、一生に一度の願いを叶えるのは職務ではないか。

ただ、受け入れてくれればいい。黙って抱かれてくれればいい。小遣いくらいはやるつもりだった。いや、それであの快樂の向こう側にまで行き着けるなら、遺産の相続者に指定してもいいと思っただ。

それなのに……。

気がつくと、物置小屋の扉を開けて中に入っていた。なぜだろう。視界が青い。

セメントの袋、スコップ、芝刈り機、鍬……それらが、まるで青い蛍光灯に照らされているかのように見える。

藤堂は静かに息を吐き、しばらくそこに立ちつくした。

なぜ、自分はいまここにいるのだろうか？

一瞬、理性がそう自問した。

あの快樂を求める気持ち、自分をここに導いてきた。そんな気がする。

意識とは無関係に、身体が動いている。

ただ、この先にある快樂は、あとき味わった喜びとは少し違う種類のものだという予感がする。

何も考えず、あとは寝るだけ。

悩みも、苦しみも、すべては解決された後に、眠りにつくときの安堵感……。

あの藥を飲んで得られた快樂が、性感の極致だとすれば、これから手に入れる快樂は、安らぎの終点だろうか。

きつとそうだ。悩んでいるのは、肉体に縛られているからなのだ。あらゆるしがらみや限界から解き放たれ、本当の存在に戻る 때가来た。

究極の悦楽があるのと同じように、究極の安らぎもある。あの体験が、そう確信させてくれた。

藤堂は顔を上げた。

視界はますます青く変わっていたが、周囲の様子はきちんと見えている。

小屋のいちばん奥に、目当ての電動工具があった。

小型の電動チェーンソー。エンジン式のチェーンソーに比べるとずっと軽いので、老人にも簡単に持つことができた。

ケーブルを解き、小屋の隅にあるコンセントにソケットを差し込む。

先週、用務員がこれで桜の木の枝を切っていたのを、彼はじつと見ていた。桜を切る馬鹿がいるかと言いたかったが、黙っていた。

どのくらいの太さの枝がどの程度に切断できるのか、観察していたのだ。

小さくても、チェーンソーの威力は抜群だった。

力士の腕ほどもある枝が、いとも簡単に切断された。

これなら失敗はありえない。

藤堂はほくそ笑んだ。

スイッチを入れる。

轟音とともに、チェーンソーは回転し始めた。支える彼の腕に、軽いショックが伝わる。

藤堂はチェーンソーを肩の上まで持ち上げると、一気に自分の首筋へ落とすように押しつけた。

新宿歌舞伎町の一角に、間口一間半ほどの小さな漢方薬局がある。店の名前は六砂堂^{ろくさどう}。

自動ドアもなく、客は、半間^{はんげん}しか開いていない木製の引き戸の間を通らないと中に入れない。一見^{いちげん}の客には、かなり敷居が高く感じられるだろう。

少し離れたところには大型ドラッグストアがあり、漢方薬も置いてあるから、普通の市販薬を買う客はそちらに入る。そのせいもあるが、繁華街の一角にありながら、店の中に客の姿が見えることは多くなかった。

壁際には様々な和漢薬の材料が入った瓶が並べられている。もちろんメーカーが出している市販薬も並んでいるが、店としては、客の相談に乗り、個別の調合をすることに力を入れていた。

その六砂堂の入口を、何の躊躇いもなく、小柄な中年男性がくぐった。

「例のやつ、まだ入ってこない？」

男性は、レジそばにいた若い店員に、いきなりそう声をかけた。

「いらつしやいませ」

守安^{まもやす}創司^{そうじ}は、伝票をチェックしていた手を止めて顔を上げた。

「ああ、あんたじゃない。……まあ、いいか。フゲン^{アルファ}の予約をしている者だけねど。鈴木っていう……」

またあの薬の話か……。

「申し訳ございません。フゲン は入荷のめどがまったくたってありません」

創司は、うんざりする気持ちが顔に出ないよう努めながら答えた。

「そう……。やっぱりね。それで……」

客はすぐには帰らなかった。

「他に何かご入り用なものがございますか？」

「いやね……なんていうか、君じゃなくて、もう一人の店員さんのほうがいいんだけど……」

「宇川うがわですか。すみません、宇川は今、ちょっと外しておりますが、六時には戻りますが」

「ああ、そう……」

客は、高価そうな腕時計に目を落とした。時刻は五時を少し回ったところだった。

「お薬のことでしたら、私が承りますが」

内心、さっさと帰れと思いつつも、職務上、創司はそう答えた。

「うん……いやね。フゲンフゲンのこと。もしかして取り次いでくれるんじゃないかと思って」

「？ ああ、あれはまったくのデマですよ」

「本当？ まあ、いいや……また寄ってみるから」

客は薄笑いを浮かべると、何も買わずに帰っていった。

男の少し丸まった背中を見送ると、創司は軽いため息をついた。このところ、こんな客が多い。

フゲン という薬が話題になり始めたのは数か月前のことだ。

惹麟堂しゅりんどうという、名もないメーカーが売りだした商品だが、回春効果があると評判になり、飛ぶように売れた。

しかし、フゲンは医薬品ではない。ラベルに表示された品名は「ニンニク加工食品」となっている。

成分表示にも、これといって特別なものは書かれていない。ニンニクエキス、牡蠣殻粉末、白子抽出物、マムシエキス、デキストリン、ローヤルゼリー……。その程度の「健康食品」は世にまた存在するが、フゲンの定価は異常に高く設定されていた。

三十錠入りで二万八千円。一錠千円弱だ。普通に考えれば、詐欺

に近い。それでも売れ続けたということは、他の健康食品の類とは一線を画すような確かな「効能」があったのだらう。

しかし、量産ができないらしく、たちまち品薄になり、裏で闇レートによる売買が行われるようになった。インターネットには「フゲン 売ります」というホームページも数多く現れた。

さらには、一部で怪しげな噂が飛び交うようになった。

フゲン には、一般には売られていない「フゲン」という特別版があり、その効果はフゲンの比ではないというのだ。

この噂には様々なバリエーションがあった。基本形は「暴力団が買い占めて裏ルートで売っている」というもの。

他にも、シテイホテルにしか出張しない高級売春組織が、女と込みで斡旋しているとか、新宿歌舞伎町に中国人風の売人が出没するとか、巣鴨にある大人の玩具屋に入り、合言葉を言うと売ってもらえるなどというもののまで、いろいろある。

中でも、ブラックジャーナリズムを標榜する某雑誌に載った与太記事はかなり傑作だった。

その記事によれば、もともとフゲン には、表示成分以外に、人間の精巣や肝臓などの「隠し原料」が含まれている。隠し原料の工場は北朝鮮にあり、そこから密輸された原料をごく少量ブレンドしたのがフゲン で、北朝鮮からオリジナルなものを直輸入したのがフゲン だというのだが、このへんまでくると、まともに取り合う者はほとんどいなかった。

もちろん、フゲン の発売元である惹麟堂は、すべてまったくのデマだと否定していた。

創司も、もとよりそんな話は信じていない。

入口からの光が一瞬翳ったかと思うと、さっきの客とは頭一つは違う、作務衣さむえを着た大柄な男が音もなく入ってきた。

「お帰りなさい」

「ああ」

入ってきたのは六砂堂の店主・嵯峨野市朗次さかのいちろうじだった。

肩まで伸ばした白髪で老人だと分かるが、背筋はピンと伸びている。

歳は七十を過ぎているが、とてもそうは見えない。肌の艶もよく、肩には筋肉の盛り上がりさえ認められる。

「宇川はまだ来んのか？」

「はい。今日は六時からです」

「いや、話があるから早めに出てこいと言ってあるんだが」

嵯峨野は一旦店の奥に消えると、白衣に着替えてカウンターの中に入ってきた。

白衣の下は素肌だ。赤黒く光沢のある胸が覗いている。

嵯峨野市朗次は、鍼治療はりや生薬調合の達人で、その世界では伝説の人物だった。

一口に達人と言うが、鍼も生薬調合も、奥の深い世界である。一方だけでも、究めるのは容易なことではない。どちらにも精通した上で、しかも達人と呼ばれるということは、普通にはとても考えられないことだった。

ただし、嵯峨野自身は、その実力を積極的にアピールはしていなかった。人嫌いで、店に出ている、客に愛想笑いでできないどころか、気に入らないと追い返してしまうことさえある。

それでも店がつぶれないのは、彼の腕の確かさを知る固定客がいるからだ。店の二階を使って、ひっそりと鍼治療をしているが、常連の中には相当な金持ちもいて、そうした患者からは高い診療費を取る。高いのではないかなどと少しでも文句を言おうものなら、二度と治療には応じない。

創司は、そんな偏屈な嵯峨野になぜか気に入られている、たっ

た一人の直弟子だった。

「宇川はクビにする」

嵯峨野はぶつきらぼうにそう言うと、突然、店の帳簿をポンと創司の前に投げてよこした。

予測できない事態ではなかった。

宇川は店の経理面をほとんど任されていたが、最近、創司も、不明朗な金の動きや仕入れ帳簿の改竄に気づき始めていた。

「使い込みですか？」

「そんなところだ。それもせせこせことやりおって。わしも前から変だとは思っていたが、あまりにやり口がせこいんで、見逃していたんだ。売上金をかすめるといいうなら分かりやすいんだが、店とは別に、勝手に汚ねえ商売をしていた」

「商品を横流ししたんですか？」

「そうだ。フゲンとかいうインチキ臭え薬を、どうしても欲しいという客に、滅茶苦茶な金額で売りさばっていた」

創司はさつき店を訪ねてきた客の、意味ありげな顔を思い出した。

嵯峨野は、メーカー製の市販薬販売にはほとんど関心がなかった。仕入れなども、一応は目を通すものの、宇川に任せきりだった。

「市販薬など、どれも似たようなものだ」というのが嵯峨野の口癖だった。

「生薬の醍醐味ってのはな、一人一人の体質に合わせた調合にあるんだ。同じ処方でも、微妙な配合比率によって効き方が違ってくる。出来合いの薬を売っているだけじゃあ、本物の薬屋とは言えん」

そうした口上を、創司は嵯峨野から何度も聞かされ続けてきた。創司もまた、店での販売業務にはあまり関わっていなかった。

宇川が店を抜けているときに交代することはあるが、時間的には長くない。

「すみません。もっと早く気づいていればよかったです」

「馬鹿野郎。おまえにはそんな細々こまこまとしたことは期待しておらん」
嵯峨野は不機嫌そうに言った。

そのとき、創司の腰にぶら下げている携帯電話が振動し、着信を知らせた。

嵯峨野の顔を一瞥してから、電話に出た。

創司くん？ 私、ミナコ。ベルベットのミナコ。今、空いてない？ 背中が痛くてたまらないの……

私用電話ではない。六砂堂の常連客でもあるソープ嬢からの出張マツサージ依頼だ。

……七時半に予約のお客さんが入っていて、それまで一時間半くらい空いてるから、その間にお願いできると嬉しいんだけどすみません。今、店を空けられなくて……

「行ってこい」

創司が断る前に、電話の内容を察知した嵯峨野が、遮るようにそう言った。

「店はわしがおるから大丈夫だ」

「分かりました。今から行きます」

創司は、嵯峨野の顔を見ながら、電話の向こうのミナコに答えた。

「ついでに飯も食ってこい。伝授は九時からだ」

「はい」

こんなふうに、風俗店で働く女たちから出張診療を頼まれることがよくある。これは嵯峨野も公認の「修行」のひとつだった。

嵯峨野は、金を取らない限り、創司が他人の診療をすることを認めていた。いや、むしろ積極的に勧めていた。生きた人間をど

れだけ相手にしたかによって、技は高まっていくからだ。

風俗嬢の場合、仕事中は店から離れることはできないので、店が暇な時を見計らって、出張診療を依頼してくる。

嵯峨野はほとんど出張診療をしない。それに風俗嬢からは高額診療費を取るのだから、女たちはもっぱら弟子の創司に出張診療を頼んでくる。嵯峨野から渡されている携帯電話は、主にその受け付けと、創司が店から離れているときのための連絡用に使われていた。

店を一步出ると、そこは日本でも有数の歓楽街・新宿歌舞伎町。風俗店のまがまがしい看板が林立する路地を抜けていく間に、ポン引きに声をかけられることもよくある。

足早に歩いていると、人混みを縫うように、前方から若い女が一人で歩いてくるのが目に留まった。

シャギーカットの髪が肩の上で軽そうに揺れている。

服装は、地味な半袖のシャツブラウスに、膝頭くらいまでのスカート。肩から布製のショルダーバッグを提げている。

互いの距離が縮まるにつれ、創司の目はその女に釘付けになった。近くで見ると、思ったよりずっと若く、まだ高校生のようにも見える。

化粧つきの顔は、知性と意志の力だけで十分に美しい。何かに怒っているようにも見える鋭い眼差しが、周囲の猥雑な風景を拒絶するかのようになり、行く手をきつと見つめていた。

すれ違った後も、創司は歩を止めて彼女の姿を目で追っていた。すると、エスニックファッションマジ・麗裸レイラ という看板が出ている小さな雑居ビルに入っていた。

あんな子が性風俗の店で働いているのか。

軽くため息が出た。

この町で働いていると、たいていのことには驚かない。若い女が一人で歩いている場合、かなりの確率で、性風俗の店で働く子である。その中には、一見して清纯そうな美人もかなり混じっている。

場所柄、六砂堂にもそういう女性たちが客としてやってくる。一日中、日の当たらない、決して衛生的とは言えない部屋で裸で働く彼女たちは、様々な健康障害に悩んでいる。生理不順、冷え性、腰痛、皮膚炎、不眠症、不安神経症……。西洋医学に不信感を持つてというよりは、噂を頼りに、漢方薬や鍼治療の門を叩く女性は少なくない。

それにしても、今、ビルに消えた少女は、創司が日頃から接している風俗店で働く女性たちとはかなり違う雰囲気を持っていた。そのとき、見覚えのある痩せた男が、少女が消えた雑居ビルの中に、後を追うように入っていた。

宇川だった。せせこせことごまかした売り上げ金で、性風俗店で遊ぼうというのだろうか。

創司は、嵯峨野が店で待っていることを彼に告げるため、店の入口に近づいた。

麗裸^{レイラ} という風俗店の看板は一階のもので、すぐ横に二階への階段があった。二階の店はつぶれて空室になっているらしく、狭い階段室にはゴミと化した電飾看板が放置されていた。そこで、宇川は、さっきの少女と何やら話をしていた。

宇川は小さな紙片のようなものを少女に渡し、それと引き替えに、少女は茶封筒を宇川に渡した。中身は金に違いない。少女が宇川から何かを買ったとしか見えなかった。

そこまで見届けると、創司は店から離れた。

すぐに二人が出てきて、宇川は六砂堂のほうへ、少女は元来た道に戻っていった。

バランスのとれた若い身体が、倦怠感に満ちた人混みを切り裂くように進み、すぐに見えなくなった。

何か、不思議なものを見てしまった気分で、創司はしばらく少女が消えた方向を見つめていた。

ミナコのマッサージに遅れてしまうので、創司はそのままベルベットに向かった。後は嵯峨野に任せておけばいい。

しかし、宇川は彼女に何を売ったのだろう。一瞬しか見えなかったが、ただの紙片のようだった。薬などではない。しかも、宇川と少女は初対面ではなさそうだった。なぜか妙に引つかかるものを感じた。

ベルベットは、西武新宿駅からコマ劇場方面に斜めに抜けていく路地に面した雑居ビルの中にある。

七階建てのビルの、四階以上が全部この店で占められている。歌舞伎町随一の高級店で、女の子の質にも定評があった。

女の子たちの控え室が狭いので、部屋が空いているときは、店長の了承を得て、個室でマッサージをする。ソープ嬢と客の役割がほぼ逆転するわけだ。

エレベーターで四階の受付まで登ると、カウンターの中にいた店長に目配せした。

「いらつしやい。こちらへどうぞ」

一般客の手前、店長の言葉遣いはていねいだ。そのまま直接従業員控え室に案内される。

従業員控え室では、ミナコが待ちかねていた。

「七時半には客が入るの。慌ただしくてごめんなさいね。もう背中がパンパンで、吐いちゃいそう」

そう言いながら、ミナコは店長のほうに意味ありげな視線を送った。

「終わったら私もお願いできないかしら？」

隣にいたリリーが甘えた声を出した。

「リリーさんは今お客さん入ります」

店長がすかさず釘を刺す。

高級店だから、客がつくと二時間は抜けられない。

リリーは残念そうに口元を歪めた。

店にとって、創司は複雑な存在だった。

創司の出張診療で、体調不良を訴えていた女の子が嘘のように回復する。結果的には女の子の病欠率が減り、サービスも向上するから、その点では店にとってもプラスになる。それが分かり、この店では営業時間中であっても、予約客がない限り、創司の出張診療を黙認してくれている。しかし、けじめをしつかりつけなければ、従業員の統制が乱れる原因にもなる。

ミナコの後について、創司は個室に入った。いつもの七階の奥。高級店の割にはあまり広くはないが、その分、調度品などは凝っている。バスタブは人工大理石で、フランス製だそうだ。

ミナコは少し日本人離れた彫りの深い顔立ちで、虹彩の色が薄い。最初はカラーコンタクトを入れているのかと思ったが、そうではなかった。生まれつき、少し青みがかっているのだ。肌の色も白いし、訊いたことはないが、白人の血が混じっているのかもしれない。

「じゃあ、まず舌を出して」

と創司が言い終わる前に、ミナコはペロツと舌を出した。

舌の様子で健康状態がある程度は分かる。

苔状の白い部分が増えていて、少し荒れていた。

次に、創司はミナコの首筋に軽く手を当てる。

熱はないし、リンパ節も特に腫れてはいなかった。

チヨゴリのような服の前をたくし上げて、ミナコの腹部を露出

させると、ミナコはもどかしそうにそのまま服を脱いで、キャミソール姿になり、そしてさらにキャミソールも脱ぎ、ブラとTバツクのショーツだけになった。

この前診たときより、少し贅肉がついた感じた。

仕事柄、若い女の裸は毎日のように目にしているのだが、本当に美しいと思える身体はそう多くはない。形として整っていても、若さを感じられない、不健康な肉体も多い。

「じゃあ、ブラも取って仰向けになってください」

「はい」

ミナコは素直にブラを外すと、ベッドの上に仰向けになった。柔らかい乳房は、寝てしまうと美しい形が崩れるのが惜しい。診療に集中しようとする創司の心が少し乱れる。

白い腹部に手を当て、次に耳を当てて腸の動きを探った。

「便秘気味でしょうか？」

「よく分かるわねー。さすが名人」

「よしてくださいよ。名人は師匠のほうで、俺はまだまだ修行中の身です」

「でも、私は嵯峨野のじいちゃんより、創ちゃんのほうが相性がいいの。じいちゃん、うまいかもしれないけれど、なんか雰囲気怖いんだもん。触られると、ちょっと身体が固くなっちゃう。リラククスできないんじゃないじゃ、マッサージにならないものね」

「そうですか……」

背中が凝っていても、まずは身体の正面から診ていくというのが創司の流儀だった。いや、創司の、というよりは、師匠の嵯峨野のやり方だ。

首の横から鎖骨の上、柔らかいために両脇に向いてしまった乳房の横……と、ゆっくり指先で触れていく。

マッサージしていくというよりは、体内の「気」を探っていく

のだ。

短時間で凝りをほぐすには、物理的なマッサージよりも、「氣」をうまく動かしてやるほうが効果的だ。

一日に何人も客と肌を合わせる風俗嬢の場合、肉体的な疲労からくる凝りに加えて、客から「邪氣」を吸い取ってしまうことがよくある。

多くの客は、単純な性欲のはけ口というだけでなく、様々なストレスや不安、劣等感、満たされぬ想いを癒されようと風俗店にやってくる。無意識のうちに、精液と一緒に精神の汚れを放出したいと願っているのだ。

だから、気持ちの優しい風俗嬢ほど、そうした客の「邪氣」を吸い取ってしまう。客から吸い取った邪氣は、彼女たちの体内に澱おじのようにたまっていく。

ベッドの上に仰向けになったミナコを見下ろすと、白い肌の向こう側に、澱みきった「氣」が見える。ミナコの場合は、大体いつも、中極と呼ばれる、恥骨の上約二センチあたりにあるつぼに邪氣がたまる傾向がある。

今回もそうだった。

他にも、乳房の裏側あたりに澱よじみがありそうだった。創司は、触れるか触れないかくらいの距離を置いて両乳房の上に掌をかざし、自分の気を送り込んだ。

澱んだ邪気を少しずつ動かすように、そつとマッサージするにつれ、ミナコの柔らかい乳房が、創司の掌の中で独立した生き物のように呼吸し始める。

はあーっと、ミナコは吐息を漏らす。その吐息と一緒に、体内にたまった邪氣が少し外に排出される。

「しつこく乳房にしゃぶりついてきた客がいませんでしたか？」
「そうなのよー。昨日のお客さんに、最初から最後までおっぱい

にこだわる変な人がいたのよね。四十くらいかな。頭つるつるに剃っててね。作家だつて言つてたけど、本当かな。揉むとか吸うとかじゃなくて、頬とか頭とかをすりつけてくるだけなの。それだけで五分も十分も。最後はなんか気持ち悪くなっちゃって……。でも、そんなことまで分かるの？」

「いつもより乳房に疲れがたまっているようですから」
創司は敢えて「気」という言葉を避けて「疲れ」や「凝り」と言う。妙にオカルトじみで受け取られたくないからだつた。

信用されないからではない。むしろ逆で、風俗嬢や水商売の女性たちは、人一倍、この手の話に乗りやすいところがある。

仙道、風水、気功……そのへんの知識をいい加減に切り売りし、インチキ商品を高く売りつける連中も多い。健康の不安につけ込むカルト宗教もある。そうした商売とは一線を画しておきたいという気持ちがあつた。

乳房から下へ少しずつ移動し、股間にたまつた邪気を動かそうと、さらに強く気を送る。

指先は腰から股上のあたりを軽くマッサージしているが、物理的な力で血行をよくするのではなく、指先から気を送り込み、ミナコの体内に澱んでいる邪気を動かす。

U字溝にたまつた汚物が雨で押し出されるように、邪気が動き始めるのが分かつた。こうなればもう一息だ。

「じゃあ、うつ伏せになってください」
ミナコは黙つて身体を反転させる。すでに表情は恍惚としている。

首の後ろから背中の上部にかけて、前よりも脂肪が付いていた。この脂肪もくせ者で、風俗嬢の場合、不規則な生活やストレス発散のための暴飲暴食が原因で太ることが多い。自然に年輪を加えた身体の丸みは年相応の色気にもつながるが、風俗嬢が少しずつ

ためていく脂肪には邪気が宿りやすい。

上腕部を揉み、背骨の両側を下に向かってマッサージしていく。指圧のように強くは押さない。指圧で効果を上げるには時間が足りないからだ。

背中側にたまった邪気をもみほぐすようにイメージしながら、指は腰のほうへと下りていく。

ミナコが軽く鼻を鳴らした。すっかり身体がリラックスしている。

この瞬間にも、邪気は鼻の穴を通って外へ排出されているはずだ。

Tバックのショーツは、後ろから見れば、履いていないも同然だった。

その光景に惑わされず、尻の中心部を軽く指圧する。

次に掌で円を描くようにもみほぐしながら、やはり邪気を動かすようイメージする。

仰向けになっていたときに動かした邪気の塊が、股間のほうに下りてきている。背中側から集めて押し下げてきた邪気と合体させ、ひとつの大きな邪気の塊にまとめたところで、最後の作業に入る。

Tバックのストリングスの間から、かすかに左の中指を滑り込ませる。しかし、軽く触れるだけで、決してそれ以上は挿入しない。

出口はこちらだと言いつき聞かせるように、指先に気を込め、ミナコの股間にたまった邪気を吸い寄せる。

「あ……あう……」

眉間に小皺を寄せて、ミナコはため息を漏らす。

その瞬間、膣口から、煙が吸い出されるように、邪気の塊が出てきた。

これが「見える」ようになるまで、五年の修行を要したわけだが、嵯峨野に言わせれば、五年で邪気が見えるようになる者などいないそうだ。達人と呼ばれる嵯峨野ですら、十年以上かかったという。つまり、創司には嵯峨野以上の才能があるらしい。

問題はこの瞬間だった。

ミナコの体内から抜け出した邪気を自分の身体が吸い取ってしまわないよう、全身の「正気」を結集させ、跳ね返す。これを嵯峨野は「気を張る」と表現する。

気の張り方が中途半端だと、ミナコの身体は楽になっても、抜けた邪気が創司の体内に入り込み、今度は創司自身が体調を崩してしまうことになりかねない。

修行の初期段階では、何度もこれにやられ、寝込んだものだ。

ミナコの体内にたまっていた邪気は、いつになく強く、しつこかったが、幸い、うまく跳ね返し、部屋の中の空気に逃がすことに成功した。

邪気は水に溶ける。

創司はそこで慢心せず、空気中に拡散しようとする邪気をバスタブのほうに誘導し、シャワーの水で排水溝に流した。

うまく治療できた安堵感から、思わず軽い吐息が漏れた。

気を張っていた状態から、自分の身体の状態を少しずつ元に戻す。

シャワーから水を流している創司を、半ば放心状態になっているミナコが不思議そうに見つめている。まだ、言葉を発するまで意識が戻っていないようだ。

そのとき、ドアの外を誰かが走っていく気配がした。こういう場所では、走るという行為はそうそうあることではない。

ミナコが不安そうな顔をした。

どこかの部屋で、客が無茶な要求をし、女の子がフロントに助

けを求めたのだろうか。

高級店のほうが、夕チの悪い客は多い。高い金を払っているんだから、どんなリクエストにこたえるのも当然だという顔をする。薬をやっている客が紛れ込むこともある。

嫌な予感は的中した。しばらくすると、ドアがノックされた。

ドアを開けると、店長が真っ青な顔で立っていた。

「血を止められるか？ 隣の部屋で、お客さんが血まみれなんだ」「見てみましょう」

創司はすぐに店長の後に続き、隣の部屋に入った。

入口のそばに、リリーが放心状態でへたりこんでいた。バスロ―ブさえ羽織っていない全裸のままだ。

部屋の奥を見やるなり、創司は思わず息を呑んだ。

奥のベッドの脇に、全裸の中年男が倒れていた。男の周囲だけではなく、部屋中に血飛沫が飛び散っている。一目で、動脈が切れたことが分かった。恐らく即死だろう。

男の右手には、刃渡り十センチほどのナイフが握りしめられていた。血糊をなるべく踏まないようにして近づくと、右耳の下から、まだ血が流れ出していた。

それにしてもよくここまで見事に切れたものだ。切ると言うよりは、耳の下にナイフを突き刺して引き抜いたのだろう。相当の思い切りと「技術」が必要だ。

一応脈を確かめてはみたが、もちろんなかった。

「どうしたんです？」

創司は諦めて、リリーに訊いた。

「どうもこうもないわよ。終わりで、上がり湯の準備をしておいてちよつと目を離したら、こうなっていたのよ……」

リリーはかすれた声で言った。

「自殺ってことですね？」

返事をする代わりに、リリーはしゃくり上げるように首を上下させた。

「冗談じゃないぜ。なんでこんなところで」

店長の声も、興奮と怒りで少しうわずっていた。

「救急車より警察ですね。完全に死んでますから
創司は冷静に宣告した。」

(立ち読み版 その2へ続く)